

# 一 經濟學史上に現れた重農主義の解釋

— W・スタアク著 「經濟學史—社会發展との関連における」 —  
澤村榮治訳

東 井 正 美

一

そもそも、重農学派 Physiocrates とは、一八世紀のフランスにおけるケネーおよび彼の学説を中心となす一派である。そしてそれは、剰余価値の起源に坎する研究を、流通の部門から直接的生産そのものの部面に移し、またかくして資本制的生産の分析の基礎をすえたと評価されている。

実に資本制生産についての最初の体系的把握である、ケネーの『經濟表』は、文字の發明および貨幣の發明とともに三大発見の one に数えられ、マルクスの『再生産様式』とともに、經濟學上の天才的な着想として讃えられている、ことは周知のとおりである。

かかる重農学派の学説については、従来より、洋の東西を問わず、種々論議の的となつており、論議しつくされた観がある。ところで、この重農学説について、異色あるひとつの解釈が、一經濟學史の書物の上に現れた。それは、W・スタアク著、沢村栄治訳「經濟學史—社会發展との関連における—」に現れた、重農主義に対するひとつ

一 経済学史上に現れた重農主義の解釈（東井）

四〇

スタアクは、歴史的相対主義の研究方法から、重農主義学説、特に、「農業のみ生産的であつて、商工業は不生産的である」とのケネーの基本観念を、歴史的背景において、理解し説明している。この理解の仕方、説明の仕方において見事であり、異色がある。もつともケネーが農業のみ生産的であつて、商工業は不生産的である、という意味は、「農業は、『純生産物』<sup>プロデュース</sup>（剰余生産物→剰余価値）を創造 generation するけれども、商工業においては、ただ費用の合計 addition あるのみであつて、富（剰余価値）の創造はありえないから、というのである。ケネーのこのような理解が、かれにおける価値把握の不十分、というよりむしろ価値一般の分析の欠如、したがつてまた剰余価値把握における限界を表明するものであることは、マルクスによつてすでに余すところなく剔抉されているとおりである。」ところで、「商工業を一括して、不生産的というケネーの理解が、誤謬と同時にまた正当性をも含むことは、労働価値論の理解に照せば、ただちに判別されるであろう。いうまでもなく、ここに誤謬というのは、工業の不生産性に関してであり、正当性というのは、商業のそれに関するものである。」こういつた解釈が、既に、横山正彦教授「ケネー商業論とその歴史的意義」（経済評論 昭和三年三・四月号）においてなされている。しかしてかかる実践的に優れた解釈があり、このような解釈をスタアクの重農学説に対する解釈に求めようとして求められないけれども、だからといつてスタアクの解釈を捨ててしまうには忍び難いものがある。というのは、スタアクが飽迄その解釈を歴史的事実に則り、それに観照し去つてなしており、社会発展との関連において重農主義の把握に成功しているからである。

だから、本稿ではスタアクが彼の著、「経済学史—社会発展との関連における—」でなしている重農学説につい

ての解釈を紹介しよう。そのさい、この原著には沢村栄治教授の訳になる日本版訳書があるから、それをも併せて紹介しておこう。

二

先ず、W・スタアクの重農主義学説に対するひとつの解釈を紹介する前に、この解釈がなされている著書の訳書すなわち、W・スタアク著、沢村栄治訳「経済学史―社会発展との関連における―」の紹介をなしておこう。

この書は、Werner Stark, *History of Economics, in its Relation to Social Development, 1652* の翻訳書である。そしてそれは「関西大学出版部」から、昭和二十九年二月一〇日に出版され、つづいて昭和三十〇年四月一〇日に第二版が出版された。

原著者であるスタアクは、訳者によれば、「もと英人ではなく、九〇九年十二月二日、チエッコスロヴァキア―当時はオーストリアであつた―のマリエンバットに生れ、プラアグ・ハムブルク・ジエノヴァ大学、及びロンドン・スクール・オブ・エコノミクスに学び、プラアグ大学で法学の、ハムブルク大学で政治学の、学位をとり、エディンバラ大学でM・Aをとつている。一九三七年にプラアグ大学政治学部の社会立法の講師レクチャーとなり一九三九年まで教壇にあつた。一九四一年には一九三九年に亡命したことはその『序』に見える―ケムブリッジ大学の客員講師となり、―その間にこの書に対する準備及び刊行がなされた事情は同じく『序』に語られている。―ついで一九四五年にはエディンバラ大学の終身講師となり、更に一九五一年からはマンチェスター大学の助教リイターとなり、経済思想史を担当、今日に及んでいる。」(沢村、「訳書」、訳書のことば、ii)

訳者、沢村栄治教授は、昭和一四年京大経済学部卒業後、京大助手、高松高商教授を経て、現在本学関西大学教授で、「経済社会学」を担当され、今日におよんでいる。そして訳者が原著書を翻譯出版された動機といえば、原著に「直截な共感と同意」をもち、「訳者の関心をつよく惹き」つけられたことであつて、本訳者の出版となつたのである。なお、「直截な共感と同意」とは「原書は *the International Library of Sociology and Social Reconstruction* の一冊であり *Routledge & Kegan Paul Ltd.* 刊行のものである。外見は、著者自らがつうようた『小』著であり、『教科書』的なものであるけれども、内容、乃至は問題を取扱う観点等は、われわれがわが国において容易に連想する『教科書』的なものを超えていると考えられる。……とも角それらの点は著者の謙遜ないし形式的な表現であると差しおいて、何ら成心なく直下にこの書を取り上げるならば、まことに含蓄的な、従つて教えられるところ多いものであることが見出されうるであろう。

著者の立場が歴史的相対主義であろうと何であろうと、そういう枠入れをするよりも先に、『小著』であり乍らも「<sup>(原)</sup>社会発展との関連において、経済学の歴史を捉えようとし、また捉えてきた—その程度は別として—ことについて、われわれはもつと直截な共感と同意とをあらわしてもよいのではなからうか。」（傍点筆者、「同」「同」）ということであり、訳者の関心をつよく惹きつけたことは、

「著者は……その閱歴を訳者に報じた際に、——一九五三年七月二四日附私信——更に語をついで次のようなことをも述べている。『自分のマンチェスター大学での教授は広汎な範囲に及んではいるが、しかし主として経済思想と社会学との歴史に重点がおかれ、わたくしはこれら二つの主題を相互的に実り多きものたらしめようと努力している。』——この点がこの書物を理解する一つの鍵ともなるであろうし、私事にわたるを許されるならば、訳者の関心

をつよく惹きつけたこの書の態度の、いわば底流であるともいえよう。――」(「同」ii)  
と、いうことである。

このような訳者の原著に対する「共感と同意」、および「関心がよく惹きつけられたこと」らによつて、かくして、本訳書が出版されることとなつたのである。このような「共感と同意」は、また宮内博氏の「スターク著『社会発展との関連において理解された経済学史』(関西学院経済学研究会「経済学論究」、昭和三〇年七月刊)において述べられている言葉、すなわち「ここに取上げるスターク博士の著作は、近世以降の経済思想の変遷を極めて手際よく説明しながら、その社会発展との関連性を明快に理解させる優れた学史研究書であり、それ故に注目されるべき試みといひうるであろう」ということにも、通ずるであろう。

沢村栄治教授の訳書・「スターク著『経済学史』——社会発展との関連における——」の底本には、前述の如く、「Werner Stark, History of Economics, in its Relation to Social Development, 1952」が用いられている。そしてその原著版は附Ⅱの増補を除いては、初版一九四四年版とは異なるところはなう。

「原著」は、その篇別構成においてさの通りである。

#### 序

社会発展との関連における経済学史

附録Ⅰ 経済学史の形式的諸問題

附録Ⅱ 経済学史の主要文献

索引

「訳書」ではこれに、「日本版えの序」、「訳者のことば」をつけられている。これが、またとりもなおさず、

一 経済学史上に現れた重農主義の解釈(東井)

本「訳書」の篇別構成でもある。

「訳書」は、原著をそこなうことなく綿密にしかも忠実に訳出されている。訳者が「出来うる限り原著に忠実を旨」とされたことは成功している。もつとも、訳者自ら断つておられる如くに、「翻譯技術上後者を前者とかえた場合や、引用文献の挿入個所の変更などは若干ある」けれども。

「訳書」には、「原著書」の一語、一語、一句、一句が逐うごとくに訳出されている。例えば、「transition」を「変移」と、「self-interest」を「自利」と訳出し全書を通じて統一、訳出されている。後者は一応措き、スタアの歴史の相対主義的方法より書かれた本書においては、「transition」という語はひとつの歴史体系または思想体系がいろいろな方向へ進むという可能性をもつ時代を表現すると考えられるから、「transition」の意味を「変移」という語をもつて訳出し統一されているように思われる。

「訳書」は非常にわかりやすい言葉でしかも名文で、「原著書」の再現に一応成功している。その一証左として、原著者の思想の根本とも考えらる一節を次にかかげよう。

「われわれには永遠の真理のヴェールを除くことが出来ない、ということを知っていることは、全くわれわれの仕事に陰鬱な色彩を与えるかも知れない。しかし、束の間なることは人間たるもののもつ運命であり、われわれはこの事実を考えに置かねばならない。ヨシユアがアイヤロンの溪谷でなした如く、星に静止せよと命ずることはわれわれには許されていない。真理は、日々の糧の如く、日々に新らたに獲られねばならない。そしてこの仕事においても、他のすべての仕事におけるが如く、科学や学問は単に生の鏡に他ならないのである。」（「訳書」九五頁）

実に美事な名文である。原著書を台なしにすることなく、原著書をいきいきと再現・描出している。そしてこれ

は、訳者、がいかに経済思想史的にはいうまでもなく、哲学的・文学的造詣が深いかを唯弁に物語っている。

「訳書」全篇をつらぬいて、文章は、非常にわかり易い表現を旨としており、それに非常にこつている。このことは反面において、欠点となり、本「訳書」を読みずらくさえしている点がないことはなかつた。例えば、「しかし乍ら事態をそんなに容易に棄却することは不可能である」(「訳書」一五頁)は、読みづらく、これは卒直に「しかし乍らその問題をそんなに容易に片付けてしまうことは不可能である」(“It is, however, impossible so lightly to dismiss the matter.” Op. cit., p. 10.)としてはどうか。こういった点が若干見受けられた。もつとも、これは主観の相異ではあろうが。

「引用句は」を用い、著名な訳本のあるものはその訳文をつとめてそのままに採用」されている。但し「一字一句同じであるというのではない。特にたとえばケネエの場合の如く、邦訳はフランス語版からのものであるが、この原著の引用は英語であり、従つて両者必ずしも正確に一致しておらないようなときには、本訳書ではひとまずこの原著に「従つて」いる。この点が、本訳書のひとつの特色であろう。読者にとつては、本訳書を読みながらそこに出てくるひとつの学説について、それが訳本をもつかいなか、といふことが、ふところのまま、自づと判明する。これは読者に大きな便宜を与え、本書の大きな特色として高く評価してもよいであろう。但し訳者が、ことわつてゐること、すなわち「正確に一致しておらないようなときには、本訳書ではひとまずこの原著に「従つた」ということを除いて、引用された著明な邦訳がかならずしも、原文に忠実ではなく、誤訳がないことはないから、著名な邦訳をそのまま採用されたことにたいして筆者は疑をもつ。しかしこの欠点を、先の利点が補つて余りあるから、ある程度の欠点も止むをえなかつたことは思われるが。

本訳書では、原著書の引用文献をいちいち点検され、その引用頁の正否まで調べあげられている。例えば、「原著一七・五一・五二・六三頁にはそれぞれ、「」がおちており、六三頁では「」が余分である。原著一五頁(本訳書二三頁)のケネエ全集の引用頁については三五一とあるが、これは三三一の誤りであろうと思われるので、すべてそのように訂正」されている。この意味で、本訳書は、むしろ原著書よりも正確である。但し、ポアギユイベールの「フラン詳論」は、(Detail de la France, 1697) (「訳書」二〇頁) となつてはいるが、この書の出版は、一六九七年ではなくして、一六九五の誤りではないだろうか。これはたつたひとつ原著のミスを見過された本訳書上に現れたミスである。なお「訳書」(一五頁)で、「大内兵衛訳スミス国富論岩波文庫版第三分冊七頁」とあるは、七・一〇頁であり、「訳書」五〇頁での「ゆかさ」のあとに「」が落ちてゐる等。これらは「訳書」のミスである。念のため。

最後に苦言を呈しておきたい。それは本訳書上に現れた若干の誤訳と不適訳についてである。その例を二・三指摘しておこう。

イ、「慾というものが道徳の範囲内にある如く、重農主義は経済的異常のひとつである」(「訳書」一五頁「原書」一〇頁)とあるのは、「重農主義の経済的逸脱におけるは、どん慾の道徳的逸脱におけるが如し」(“Mercantilism is among the economic aberrations what avarice is among the moral.”)の誤訳であらう。

ロ、「新しく採用された機械が、もし一層適当なものであるならば、新しい生産費の要素として、解雇された職工の位置に入り込んで来るからである」(「訳書」五六頁、「原書」三四頁)とあるのは、「新しく採用された機械が、新しい生産費の要素として、たとえそれが比較的些細なものであろうとも、解雇された職工の位置に入り込んで来

るからである」(For into the place of the dismissed workmen steps the newly introduced machinery as a new, if more modest, elements of costs.) の誤訳

ハ、「一七五〇年と一八五〇年の間の穀物市場の発展という形勢に他ならなかつた。」「訳書」六四頁、「原書」三九頁)とあるは、「…の穀物市場の状態というよりもむしろその発展であつた」(But it was not so much the state as the development of the grain market between 1750 and 1850 which taught……)の誤訳である。

ここで例示した誤訳のほかにも、誤訳と不適訳が僅かではあるが、ないことはなかつた。これについては既に訳者に直接にただしておいたのでここではふれない。ともあれ、本訳書にはこのような誤訳・不適訳が見受けられたが、訳者が公私多用、特に前者にとらえられて「身動き出来ない」有様があり、「身二つあつても足りない境涯におかれて」おりながらも、敢然として「原著」ととり組み、「幾多の障害」を克服しながら、かかる立派な「訳書」の出版されたことを考慮すると、その誤訳・不適訳をかくも僅少に止めえられたことに対してむしろ敬意を捧げたいくらいで、それを非難し咎める気持にはなれない。そしてまた、本訳書の第二版では、第一版の不備な点を整備され、ある個所では不適訳を正しておられ、第一版よりも優れたものとなつてゐるから、ここに指摘した点をも含めて、訳者が現在気づかれている点を近々訂正されて第三版を出されることであろう。だから第三版では「原著」に近づいた完訳が出版されるであろう、そしてそのことを期待しよう。

なお、原著全内容についての紹介は、宮内博士の、書評「スターク著『社会発展とその関連において理解された経済学史』」(関西学院大学経済学研究会「経済学論究」第九巻第二号)にゆずり、主題に入ろう。

## 三

W・スタアクは、彼の著、「経済学史—社会発展との関連における」における「経済学史の形式的諸問題」の意図は、「簡潔なスケッチで、近代の経済学の発展の鏝を形成してきた主要学説についての、首尾一貫した解釈を与えようとする企て」をなすことである。その際、「特別の注意が、重農主義の体系や限界効用の体系にはらわれ」ている。スタアクが特別の注意をその両体系にはらつた理由は、スタアクが、これらの理論については、「いまだその歴史的背景において理解せられ、説明せられていなかった」、と考えたからである。また、「一般の意見はなお、前者を絶対的誤謬、後者を絶対的真理とみなしている」ので「われわれの歴史的觀念が、それが成就しようところのものをもつともよく示すことが出来るのは、ここにおいてなのである」からでもある。（以上「訳書」一一—一三頁、「原著」八頁）

ここに、スタアクの、彼の著の主題、「社会発展との関連における経済学史」の意図が述べられているのはあるが、同時にここから、スタアクの経済学史の研究方法は、歴史的相対主義であることが、自づと明らかとなる。それについてスタアクがもつと単的に吐露した力所がある。そこにおいて、スタアクは、いう。

「経済学は社会の科学であり、その諸変化と共に変化しなければならぬ。いつの時代の人びとも、自己の見解や願望が理性の完成であるという妄想におち入つて了つており、そして、すべての時間によつてうちやぶられて来たのである。現在よりも過去をよりよく知ること、すべての世紀を一瞥のうちに理解することがその仕事である。歴史家は、人間のもつプリミティヴな自愛と妄信ともとづくこの宿命的な過誤を、けつして共有すべきではない。

ランケはいう。「神の前には、人類の一切の世代は等しい権利をもつてあらわれる。そしてこれが、歴史学徒の自己の主題をとりあつかうべき方法なのである、』と。賞讀や非難を行うことが彼の使命ではなく、その成果において過去を理解し、そしてそれをして理解せしめることが歴史家の使命である。経済学の発展がここにとりあげられるのはこの精神においてであり、また社会発展との関連において経済学の発展が解釈せられるのも、この精神においてなのである。」（「訳書」六一七頁、「原著」四一五頁）

この一節のなかに、スタアクの学史研究方法が歴史的相対主義であることを、遺憾なく表現している。歴史的相対主義とは、それをおしなべていえば、歴史的思想の客観的把握という点においてすぐれ、他方、実践的立場の自覚形成の喪失という点において劣る、ものである、ことはいうまでもない。ともあれスタアクがそのような方法をもつて重農主義学説に対していかなる歴史的背景においていかなる理解をなし説明をなしているかの、本筋に立ちもどらう。

少し煩わしいが先ず重農学派は、スタアクによれば経済学発展途上のいかなる段階に属しているであろうか、から紹介しよう。

スタアクは、経済科学の発展を概観し、その発展が四つの区分に分れているという、すなわち、「ポディヌスとヘイルズ、カアルやカンティヨンとケネエ、ミュラアとシスモンディ、及びジェヴォンズとメナング等が時代の境界線をひいているのである。」だから、重農学派は、発展の第二の時代を画するものである。

「カアルとカンティヨンとはじまり、ケネエとスミスとによつて決定的に左右せられた、発展の第二の時代においては、経済科学は、まさにその根幹において、啓学や神学と、あるいはむしろ両者を結合したもの、すなわち自然神論と、結ばれている。ケネエの追隨者達にとつては『重農主義』と『神権主義』とは同意語であつた。すなわ

ち、彼等が研究しようとしてたかの自然の秩序は、彼等にとつては、最高存在者、自然の創造者、人間社会の建設者にして立法者、である神 (Providence) が、宇宙に与えていた法則であつた。『われわれの利益や意志はすべて、合体する傾きがあり、また世界が幸福な人びとで充たされるよう希われる、慈悲深い神の業と見なしうる調和を、われわれの共通の幸福のために形成するに与つて力がある、』と、メルシエ・ド・ラ・リヴィエールは、その世紀に向つて言つていた。(cf. *Gide-Rist*, 9. 宮川貞一郎訳、経済学説史 上巻 一三頁参照) 同じ流儀でその後にはバステイアはかの有名な言葉を吐いている。すなわち、『社会機構は：神の叡智をあらわにし、神の栄光を告げる、』と。(Harmois économiques, 2nd. ed., 1851, 8) 創造者がその創造物に与えた『予定調和』を認識し、その証を立てることが、一七五〇—一六〇年と一八二〇—一三〇年との間の経済思想の主意であつた。』(「訳書」一三二—三三、四、「原著」七四—五)

重農主義体系とは、発展の第二の時期を画し、このような時代における経済政策体系であり、思想体系である。では、それが歴史的背景において理解せられ、説明されていなかつたことは、スタックによれば、いかなることなのであろうか。それは、大体次の三点となるであろう。

(1) 「土地こそが富の唯一の源泉である」との重農主義学派の、それに共通な、基本觀念が、後世まで非常に不可解となされたこと、

(2) コンディアックは重農主義の反対者であると主張されてきたこと、

(3) 旧学説—重商主義学説の反指定としての新しい体系—重農主義の一般的解釈、

重農主義学説に対する従来の誤つた解釈がこの三点となすなれば、それらはスタックにより歴史的背景のもとに

において、どのように正しく理解され、説明されたのであろうか。

以下スタァクのいうところを紹介せば、次の如くである。

先づ第一の点について。

『土地こそが富の唯一の源泉である』とのケネエの基本的観念は、重農主義学派に共通の思想である。例えば、

「つねに独立の思想家として描かれているテュルゴーはまさしく同じ学説」を抱いており、それは「その人の労働が土地に彼の個人的必要物以上に生産させるところのものは、他の全社会成員がうける賃銀に対する唯一の基本である。』」(Euvres, ed. Daire, 1844, 9sq...)との言葉や、「彼は工業家の類ひを不妊階級 (classe stérile) とせず描写を拒否したけれども、…彼はなおその言葉で表現される見解を共有していた。というのは彼は自ら耕作者階級 (classe des cultivateurs) としつて生産階級 (classe productive) や、工匠階級 (classe des artisans) としつて被備者階級 (classe stipendiée) と述べている」とのことやから、明らかとなる。

このような「交易と工業とはその支出以上に純利益を産み出すことが出来ない」という主張は、後世まで非常に不可解であった。

ところで、「ケネエによつて『経済表』においてたてられた分配学説は、農業の独占的生産力、および交易と工業との不毛性についての、この観念の適用に他ならない」が、「この概念構成は価値と質料との混同に、すなわち第一次生産はそれのみで新しい質料を創造するという理由で、あらゆる価値の唯一の創造者とみなされねばならないという誤った仮定に、基づいているとしばしばいわれてきた。」しかしこの議論は、「仮定された誤りがいかにして生じたか、を説明してはいない。」

スミスの重農主義批判からの一文、すなわち『工匠、製造業者および商人を僕婢と同一のものとするのは全く不当のように思われる』(I. c. 173)との一文は、「正しい方法をわれわれに示している。」「もし彼等が事実僕婢そのものであるならば、彼等は、『不妊で生産的な者のうち』に属するであろう。」

「さて一七六〇年の英国社会で虚偽であつたところのものは、同時代のフランス社会では十分真実でありえた。」当時のフランス社会では「一切の富は地主階級、すなわち貴族の掌中にあつまる。貴族は富をその農民、すなわち耕作者より得この理由でこれらは生産的である。工匠達は彼等に、生活を快いものたらしめるあらゆる種類の物を供する、そしてこの程度にまで彼等は事実有用なのである。しかし彼等は特権階級の富を増加せず、地代を払わないでただそれらを消費するのを助ける、そうしてこの理由で彼等は非生産的、すなわち被傭者階級であり、あるいはケネエがいささか不適當に言いあらわしたように、不妊階級なのである。」

このように「アン・シ・アン・レジ・ム」のフランスでは、「少数の上流階級に奉仕して、収入を生産する、農業人口の移動しない大量が存在し、彼等にやとわれて、別当や下男のように彼等の贅沢に奉仕する、町の商業に従事する住民が存在している。というのは、∴一七六〇年のフランス工業の性格は、支配的少数のための奢侈工業であつた。そしてこの重要な事実、それが重農主義体制において占めていた特異な従属的位置を説明している。」

「革命以前のフランスの地主達は殆んど工業の全産出高を吸収し、従つて工業企業者は多かれ少かれ貴族の被傭者としてあらわれた、という事実はカンティヨンの『試論』にもつともはつきり反映され、彼にとつて「工業家の模型」たる「帽子屋がほとんど専ら上流階級のために仕事をするように、一切の商人は貴族に奉仕している、とカンティヨンは信じていた。『個人はすべて、所有者の利益のために耕作される土地の産物によつてささえられて

いるのみならず、また、これら同じ所有者—その所有者の資産から彼等がもつすべてをうるのだが—の費用をもつてささえられている』これらの言葉は重農主義の歴史的根柢をあきらかにするだけでなく、—それらの言葉はまたその歴史的解明といういみをふくんでいる。』<sup>+</sup>「市の大きさは自らそこに住む地主の數に比例している。』地主達は市場を管理し生産や商業にその仕事や指示をあたえる。すなわち『人びとの種々の職業や彼等が考案する多種類の労働を奨励したり阻んだりするのは、それはつねに土地所有者達の氣息である。』この故に重農学派がただもつと明らかに定式化して来たところの彼の重農主義的概念は、ひとつのスローガンになった、とはばいつてもよいであろう。』ひとり土地所有者のみが国家において生来独立的であるということ、すなわち、他の階級はすべて、起業者であれ、被傭者であれ、いづれにせよ從屬的であるということ、私はそのことを原則として規定しよう。』

農業が生産的であり、工業が不生産的であるという見解について、「フランソワ・ケネエはリシヤール・カンテイオンと一致した。」「ケネエの活氣ある學説がまだ生命を失つたドグマとなつていなかつた時代、すなわち一七五七年に彼は、もし工業が農業のように『第一、必要品の生産であるならば、それは生産的でありうる、といこと、しかしもしそれがケネエの国や彼の時代におけるように、非難された裝飾奢侈品に役立つならば、工業は非生産的であるということ、を教示したのである。ヴェルサイユの流行社会の快樂のために、四輪馬車、鬘等を生産した工匠達は…(彼の目にもまた實際にも) 僕婢であつた。彼等は消費領域に属し、生産の領域には属していなかつたのである。』国民の利用のための手工業及び工業の商品生産は、消費の対象であるだけで所得の源泉ではない。』—『不妊階級は…消費のためにのみ働くのである。』苛酷な労働ですべての浪費を償わねばならなかつた農民のみを、彼は生産的と見做した。すなわちその農民は当時の状態では事実自分だけでなく、一家内の召使達全部をふくむ貴

族や、商業・工業をも維持していたのである。」

次に第二の点について。

「商業及び工業の生産力に関するコンディアックの見解がケネイの見解とはことなるという事実、ここに暗に示されている重農主義的体制の解釈に何ら反対の論拠ではない。コンディアックは重農主義の反対者であると主張されてきた、―がそれは非常に誤っている。というのは彼でさえ、『あらゆる…ものを生産するのは土地のみである。それは…一切の富の唯一の源泉である。』といっているからである。」「彼はまた、ケネエと基本的に一致しているにも拘らず、『なお最後に工業は又最近の分析では富の源である』という結論に達したが故に、そういう理由で矛盾を非難されてきた。しかしこの批判は矢張り不当である。われわれは一方では政治的関心のつよい社会改革家と、地方では感覚論的哲学者と、この間の差異を理解するようにつとめなければならない。そしてその差異が、原則では一致しているけれども、異なつた結果に両者を導いたものである。」すなわち「前者は、われわれの社会では農業のみが地代を生む、と言い、後者は、消費には第一列次の商品のみ重要である、と言う。われわれは、一つの問題の相反する解決ではなく、種々なる問題のそれぞれ独立の解決を得たのである。」

最後に第三の点について

『明らかに人類にとつて最も有利な…秩序』としての自然的秩序の觀念の解釈において、『重農主義はコルベルティズムに対する反動であつた、』という命題は一部分適切である。―けれども単に一部分であつて、というのはより深い分析は重商体制と農業体制との間に目的の露骨な一致が存在したということを、遂に悟らしめるに至るからである。』しかし乍ら、ケネエがその農業改革についての準則を、国民的福祉は自由貿易下でのみ榮え、国家

の干渉が行われる処では衰える、という主張に基づいていた、ということとは真実である。」

「この重農主義者の自由主義は、一見したところでは、重商主義の干渉主義に全く反対のように見える。これより由来して、旧学説の反指定アンデアエとしての新しい体系の一般的解釈が出て来る。しかし事實は、ケネエは単にコルベールの遺言の執行者にすぎなかつた。というのは、十七世紀の目標たる交換経済の展開は、フランスでは単に部分的に、ただ交易や工業に関してのみ達せられていたからである。農業は依然として封建的であつた。十八世紀が目指したこと、すなわち重農主義の文献の殆んどの頁でも、経済学派 (secte economiste) のもつとも大切な願としてわれわれが直面するものは、農業生産の資本家的諸条件への適応であり、この故に重商主義の歴史的使命の遂行である。：しかしこの種の資本家的生産は、その前提として有利な価格を有つ。そしてこれはただ干渉主義の崩壊によつてのみもたらされえたのである。かくして、諸条件変化のもとに、新しい手段で、人びとはなお旧来の目的にむかつて努力したのである。」

「生産の自由と市場の自由、この二つの着実な経済政策の公準から、自然的秩序についての重農主義学説の崇高なパトスが生じた。自然に則る法則は不必要であり、自然に反対する法則は実行不可能である、という父ミラボンの言葉は具体的な政治的綱領から抽象的な哲学体系への変移を形成している。」(以上「訳書」二二―三八頁、「原著」一四―二三頁)

以上が、スタアクの、歴史的背景における理解であり、説明である。

#### 四

農業のみ、生産的であつて商工業は、不生産的である、とのケネーの理解が、既に述べておいた如く、かれにおける価値一般の分析の欠如、したがつてまた剰余価値把握における限界を表明するものであることは、マルクスによつてすでに余すところなく剔抉され、商工業を一括して不生産的というケネーの理解が誤謬と同時に正当性を含む（ここに誤謬というのは、工業の不生産性に関してであり、正当性というのは、商業のそれに関してである）。このことは、横山正彦教授によつて明かとせられたところである。

ケネーのその基本觀念に対するスタアクの理解と説明とは、次のことにつきる。すなわち、当時のアンシャン・レイジムのフランスでは、工匠、製造業者および商人は事實貴族にのみ奉仕する奴婢のものであつて、彼は不妊で不生産的な者のうちに属し、当時の状態では、事実自分だけではなく、一家内の召使達全部をふくむ貴族や商業・工業をも維持していた、ということに基づくと、ことにつきる。さらに、工業が生産的か否かの区別については、スタアクはこう解釈する。すなわち、「第一次必要品の生産」であるならば生産物であり、もしそれがケネーの国や彼の時代におけるように、非難された裝飾奢侈品に役立つならば、工業は非生産的である、ことをケネーは教示すると。

このことについてW・B・ビイズル（William Bennett Bizzell）は、素朴な言葉で、こういつている。「いうまでもなく、重農主義学派は、純生産物がひとり農業にのみ限定された、と主張することにおいて誤つてゐる。われわれは、製造業や商業が絶えず資本投資に農業よりもより以上の利益をあげつつあることを知つてゐるが、重農主義学派が生きていた当時においては、かような企業における資本収益を重農主義学派が評価しうるほどには、製造業や商業が成長していなかつた、ということを想起せねばならない。ガイドとリストは、重農主義学派がこの誤りをい

かになしたかについての説明を次の如くなしている。『彼等のぜいたくな生活は、もし土地が小農民によつて消費された量以上にいくばくかを産出しえなかつたとすなれば、不可能であつた。重著主義学派が、職人を、彼等の生存それ自体を農業家に依存している僕婢にすぎないものとみなしたにもかかわらず、重農主義学派は、無価値な地主が等しく彼の小作農に依存していることをかっぱしえなかつた。もしもそのかわりに安楽にぜいたくに暮し、分配分をえている実業家が存在したとするならば、重農主義学派は、工業企業にも純生産が存在したとの推論に到達したであろうことは、全く起りうることである。』(Origine d'une Science Nouvelle, page 16.) (W. B. Bizzell, Farm tenantry in the United States, 1821, p. 48.)

かくして、農業のみ生産的である、とのケネーの基本観念は、実に当時の歴史的事実の反映ということになるだろう。このことを見事に描出したスタアクの解釈は、一応成功しており、異色あるものといわざるをえないであろう。そしてこのスタアクの解釈は、こういう言葉をもつていいかえうるのであろう。すなわち、それはこの言葉である。「此学派が現実分析の出発点とした当時のフランスの生産関係の制約の故に、農業―特に最高度に発達した大農経営化された農業即ち『純生産』を生じ得るが如き農業のみを生産的なりとした素朴な自然生産力説に傾き、商工業の不生産性を主張し従つて又人間労働の生産力を斯の如き根本的命題によつて規定したため、当時漸く其の關係が考察され出した市民経済社会の一般に適應すべき理論を構成し得ざりし事は又欠陥と見られ得る。」(久保田明光著「重農学派経済学―フィジオクラシー―」前野書店、昭和二十七年刊、一二七―一八頁)。

またわれわれの言葉でいえば、価値一般の分析の欠如、したがつてまた剰余価値把握における限界が、重農学派が現実分析の出発点とした当時のフランスの生産関係の制約によるものである、となる。くどくどいえば、これらの

生産関係の制約をスタアクが描出した、ことにほかならない。

もうひとつ、スタアクの解釈は見事であり異色あるものがある。すなわち、重農主義が重商主義の反動であるとなす一般的解釈を斥けた、考え方である。スタアクはいう、「しかし事實は、ケネーは単にコルベールの遺言の執行者にすぎなかつた。というのは、十八世紀が目指したこと、すなわち重農主義の文献の殆んどの頁でも、経済学派のもつとも大切な願いとして、われわれが直面するものは農業生産の資本家的諸条件への適応であり、この故に重商主義的使命の遂行である。」と。

重商主義政策が資本制生産の育成という歴史的課題をになつていたのであり、重農主義も、農業生産の資本家的諸条件への適応という歴史的課題をになつていた、ことはいうまでもない。だから重商主義も重農主義も資本制生産の育成という共通の歴史的課題をになつていたのである。

スタアクの説明を補足すれば、「十七世紀はより多くの人を必要としたと同じ理由でより多くの金を必要としたすなわち、欠亡があつたからである。そこで有効な貨幣量の膨脹が経済発展のより高い段階への変移の条件であつた。」(スタアク)十八世紀のフランスでは、「無尽蔵な自然資源をもつていたが、それを開発するための生産的資本は不十分であつた。資本の源泉は農業生産である。もしもこの源泉からくみ出された剰余が非生産行為に消費され、農業設備の改善に適応されなかつたとすれば、国家は不妊の運命を背負つている。この仮定に基づいてケネーは三つの階級の間の分配へ論議を進める。ケネーにとつては、ぜいたくと濫費とは再生産に復帰すべきである国家の所得の多くを吸収じつあつたことは、明らかである。ケネーは、現存の分配過程を示す図と表をつくることによつて国民精神にこの事実を印象づけようとする。このことは、『経済』表の核心そのものであり、彼の『純生産』

物』理論の本質である。』(W. B. Bizzell, Op. cit., p. 46.) だから、重商主義も、重農主義も、共に貨幣の欠乏を解決しようとなし、それが一方では重商主義政策に、他方では重農主義政策となつて現れたと考へうるであろう。だから、農業の「資本家的生産は、その前提として良価をもつ。そしてこれらはただ干渉主義の崩壊によつてのみもたらされたのである。かくて諸条件の変化のもとに、新しい手段で、人びとはなお旧来の目的にむかつて努力したのである。」(スタック)ということになる。もつとも、「ケネーの体系は、重商主義に対する単なる反動ではなく、それはもつぱら流部通面の内部にのみ機能するところの商業資本から生産資本に復歸していつた…この点において重商主義と対立している」けれども。

ともあれ、ここで指摘した重農主義学説のスタックの歴史的背景における理解と説明は、正鵠をつき、精彩に富み異色あるものであり、重農主義学説の解釈を歴史的発展との関連においてなしたことは、高く評価されてしかるべきであろう。(昭和三〇、一二、五)